
ネギまボックス

北中津

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギまボックス

【Nコード】

N5514M

【作者名】

北中津

【あらすじ】

これはある生徒会長が入学する少し前に始まった話。十三組の十三の異常を得たオリ主が、麻帆良学園で暴れ回ります。更新は結構亀です。

第一話 第零実験、終了。(前書き)

知っている方お久しぶりです、初めての方、そのまま初めまして。
北中津、息抜き作品です。

第一話 第零実験、終了。

この国には二校の有名な学園がある。

一つは麻帆良学園、明治中途に創立した幼等部から大学部までが集まった巨大学園都市。

そして……

「気分はどうだい？」

「おお、いい感じだ……さっすが、まぐろさん。」

そこは地下、手術室にいる男と傍らにいる男。男は重傷を負っているわけでもない、むしろ傷一つなかった。手術室と言いつつも、そこに置かれる器具はメスでも人工心肺でもなく、巨大なバッテリーの様な物だった。冷蔵庫よりも数回り大きいバッテリーには一般の民家が数週間生活できるほどの電気が貯められていた。

術後にしてむくりと手術台から起き上がる人物。

「うんうん、見たところ確かに問題なさそうだね。」

飄々とした口調の男の名は黒神まぐろ、箱庭学園二年十三組、男子学生である。外見は痩身で長髪の男性だが、顔は整っており、問題なく美形の部類に入る。彼は天才をつくり出す計画、フラスコ計

画の統括を担っており、異常集団、十三組の十三の一人であった。
しかし彼は来年には軍艦塔と呼ばれる旧校舎の管理人をしている
ことだろう。

「終わったのか、まぐろくん、偉大なる俺を待たせるのは感心し
ないぞ。」

二人しかいなかった手術室に入ってきたのは一人の王、王のオー
ラとも言えばよいのだろうか？威風堂々としたその存在感は全て
の他者をひれ伏すのに十分なほどだった。

「たった今終わったよ、王土くん。」

都城王土、箱庭学園二年十三組、検体名『創帝』

威風堂々と立つ彼の制服はまるで着る者の存在感に耐えきれない
ようにボロボロで、その目には自尊心とエゴイズムが渦巻いている。

「そうか、学園長が呼んでいる、行くといい。」

「りょーかい。」

男は立ち上がり、都城王土が入ってきた扉に向かう。

「それにしても珍しいね、王土くんが使い走りみたいなことする
なんて。」

「フン、王はこいつを気に入っているからな、王が将来治める国
の四天王の一人はこいつで決定している。王は有能な臣下を持たね
ばならん。」

王土は男の肩に手を置き、話す。

「ははっ、俺が王土さんに気に入られるたあ光栄だ、
．．．．．
それじゃあ、行ってくるぜー。」

男は扉の外に出て行った。

再び二人になった手術台の部屋。

「しかし、学園長も何を考えたんだい？——三年生は無理だったと
は言えー、二年生の異常性アフノーマルを完全とは言えずとも、全てを一人の人間に移すなんて。」

黒神まぐろは残った王、都城王土に言った。

「それは裏技というやつだ、だがそこらの異常アフノーマルではこれは受けた
だけで絶命してしまうがな、それはあいつの異常性故といったところ
だな。」

「へえ、．．．．．彼も宗像君のように限界を見せてくれるかな。」

「．．．．．」

沈黙という形で、王土は返答した。

「待っていましたよ、公夜。」

「ああ、じじい。」

先ほどの無骨な手術室から一転、豪奢とはいかなくとも高貴さを感じるその部屋は、無言で主の気品を示していた。

「あなたのその態度はどうにかなりませんか？まあいいでしょう、行橋君が読み取った十三組の十三の電気信号や周波数を読み取り、都城君の理不尽な重税の応用で公夜に異常を移す、それに耐える肉体をもつ者がいないため机上の空論になっていたが……よくぞ耐え切りました。」

「うつせー、俺は王土さんもまぐろさんも名瀬さんも古賀さんも尊敬してんよ、まあ何人かは崇拜してるけど。」

「フム……まあいいでしょう、それでは本題に移ります。」

「本題？どうせ碌な話じゃねえ臭いプンプンだな。」

「行橋君の感受性を上手く利用しましたね、流石です、それでは単刀直入に言いましょう、公夜、あなたには麻帆良学園に転校してもらいます。」

「なんだと？」

バチ……と公夜の周囲が鳴る。

「部屋を壊さないで下さい公夜、……あなたはこの学園の異常をすべて集めた。とても思っているのですか？」

「・・・・・・・・・・何が言いてえ？」

「フラスコ計画、数百年前から試験管計画として数多の異常を集め、検証してきました。しかし、世界にはまだ、判明していない異常があるとしたら？」

「確かに未知の異常くらいはあるだろうが、それが麻帆良学園にあると？」

「そう、あなたが高校に上がるまでまだ一年と三ヶ月ほどあるでしょう、その間、麻帆良学園に行き、新たな異常を見付けてきなさい。」

「なんでおれがつ「行つてきなよ、こっくく」ね、姉さん。」

公夜に張り付くように背中飛びついたのは不知火半袖、先ほどまで公夜と話していた学園長不知火袴の孫である。

「来年はあたしが入るからっ、・・・・・・・・行・っ・て・こ・い」

「・・・・・・・・・・はい。」

「ほっほっほ、さすがじゃそでちゃん」

イエーイとハイタッチする不知火コンビ。

「おお、公夜、話はそれだけじゃ、転校は冬休み明けからだからの、それまでは黒神くんの元で異常性と戦闘技術を磨くといい。」

「わーっ たよ。」

やさぐれながら、公夜は学園長室を出て行った。

数日後

「行つてきます。」

箱庭学園の校門には異常者が三人と、普通が一人。

「王^{おれ}のために修行に行くとは、お前の忠義は素晴らしい、故に王^{おれ}自ら門出に同席した。」

「公夜くん、君は異常を九割方ものにした、でも、裏の六人の異常は使わないほうがいい、あまり乱用すると体に良くないよ。」

「はい、ありがとうございます、黒神さん王土さん。」

「麻帆良についたら学園長に会うといい、向こうでも元気で。」

「ああ、それじゃあ・・・行つてきます。」

不知火公夜、十四歳、血液型A B型、検体名『永雄^{ヒーロー}』
転校先、麻帆良学園女子中等部、2年A組

第一話 第零実験、終了。（後書き）

後書きという名の言い訳。

主人公は原作めだかボックスの十三組の十三の異常をほぼ会得しています。

主人公はこの話上では中二、半袖、めだか、善吉は中三ですね。
主人公の見た目は身長170cmで外見は黒髪の哀川さんです。
息抜き作品ですので、禁書の方が主になるといいです

第二話 異常者、転入

麻帆良学園、学園長室

「フム・・・・・・・・」

「学園長、本当に受け入れるんですか？」

この部屋にいるのは学園長、近衛近右衛門、広域指導員、タカミチ・Ｔ・高畑。関東魔法協会である麻帆良学園の最高戦力の二人の顔には苦悶の顔が見られた。

「箱庭学園といえば、裏で人体実験を繰り返しているといいますが、その学園長の孫をこの学校に入れるなど。」

「しかし、箱庭学園は表向きには超伝統校、その申し入れを振るのはのう。」

二人の話は、不知火公夜のことだった。

その時、狙いを済ましたかのようにノックがする。

「失礼します。」

「おお、入りなさい。」

扉を開く人物は・・・

「箱庭学園から連絡はいつていると思いますが、不知火長袖です、

よろしくお願いします。」

「おお、いらっしやい。不知火君。」

入ってきたのは、外見は不知火半袖が成長したような女子中学生、しかしそれは行橋直伝の変身術で女性となった公夜であった。

「書類等はすでに済ませているの、では高畑君、よろしく頼むぞい。」

「はい、じゃあ行こうか、不知火君。」

「はい、ああ、それと」

「「?」?」

長袖に偽装している、公夜の声に、二人は脳裏に?を作る。

「私の転入は本意かもしれませんが、そこまで露骨に嫌うのは教育者としてどうかと思います。」

「「!!!!!!!!!!」」

「えへへへ、行きましょう、高畑先生」

驚愕している二人を放って、長袖は学園長室を後にした。

学園長室には、自分の考えを簡単に読まれ、立ち尽くしていた二人だけが残っていた。

「私が入るのは、二年A組と聞きましたが、どのようなクラスなのでしょう？」

教室に向かう公夜とタカミチ、全く乱さないペースで二人は並んで歩いて行く。

「仲のいいクラスだよ、喧嘩する人もいるけど、あれは友情の証拠だしね。」

「それは楽しみです。」

笑顔を作りながらも、公夜はタカミチの発言の正否を見極める。異常な感受性、それは行橋未造が持っていた異常性、その感受性の前には電子機器が発する電波や電磁波は騒音となり、人の発する電磁波はその者の思考となる。

公夜はその感受性をon/offでき、現在はタカミチの正否を確かめていた。

「さあ、着いたよ、少し待っていてね。」

件の教室に到着した二人、HR前ということもあり教室には出席生徒が着席しているらしい。

「さあ、入って。」

説明をしたようで、少しざわつきがみられる教室に、公夜は入った。

そして、様々な思考を耳に、教壇に立つ公夜。

「不知火長袖です。仲良くしてね。」

公夜は巨大なプレッシャーと共に、偽りの名を言った。

異常な人身支配、それは都城王土の異常性である、公夜から発せられる電磁波は対象の駆動系に干渉し、自在に支配する。

[illegible]

そのプレッシャーに反応したのはその中でも数人、古菲、長瀬楓を除けばみな裏を知る者ばかりだった。

（おーおー確かに特別が多いな．．．．．異常は．．．．．じつくり見極めるか。）

「今日の1限目は質問や自己紹介の時間に使うといいよ。」

タカミチはそう言つて、教室の隅に移動した。そして、公夜は聞こえるか聞こえないかの距離で

「敵情調査ですか。」

タカミチは目を見開くがそのまま教室の隅に行った。

(なんでさっきから……)

タカミチは内心焦っていた、その理由はもちろん不知火公夜である。

学園長室、そして先ほどの読心、確かにこの質問の時間をとったのはいまだ未知の存在である不知火長袖のことを知るためであった、もともとこの行動もタカミチにとっては不本意なのだが、その考えも先程のブレッシャーで吹き飛ばされた。

「趣味はありますか？」

「人助けを、というより他人のために生きることですね。」

「好きな人はいますか？」

「それが恋慕というのならありませんが、崇拜する人なら。」

「特技は？」

「機械関係の操作ですかね。」

「好きな人のタイプは？」

「特に、いままでそのような感情を持つことがありませんでしたので。」

キーンコンカンコンとありきたりなチャイムが鳴り響き、質問の嵐を一瞬で止めた。

そして、初日はつつがなく終わった

Side 公夜

「不知火長袖・・・・・・・・」

俺の目の前にいる奴は桜咲刹那とか言う奴だっけ？。

俺の圧力に反応した数少ない人物だな。さて、何の用だろうか。

「あなたの思惑は何だ？」

「いきなりですね、何故そんなことを聞くのです？」

と言うのもまあ嘘、あんな事すれば大抵こうなるわな。

しかしこいつは、・・・・あの袋は恐らく真剣だろうな・・・・

「あれほどの圧力を出しておきながらそんなことを言うか！！！」

と言いながら抜刀する桜咲、俺の喉に太刀が触れる。

ああ、こういう奴か・・・・先走って早死にするタイプだな、まあ今はそれよりも。

『太刀ヲシマエ、動クナ。』

「なっ！？ええ？」

俺の『言葉の重み』からは逃れられん、太刀を構える際に接近したのはマズかったな。

「貴様の太刀などどうでもいい、それよりも王が問うのはあなた、

いや、キサマの体か？」

「・・・なんのことだ・・・」

「嘘をつくのは止めたおいたほうがいい、露骨すぎる。・・・キサマの体・・・人間か？」

ゾツと殺気が溢れ出る。これは凶星だろうがまずいな・・・あまり逆上すると『言葉の重み』が聞きにくくなる、殺すのはまずい・・・身体能力的には問題ないから逃げるか。あー殺人衝動がー

「刹那、やりすぎだ。」

ん？あの褐色の人は、俺のクラスだったな。

「すまないね、その話はコイツにはタブーなんだ、ここで手打ちというのはどうだい？」

そうか、あんな電磁波を出すような奴だ、箱庭学園でもないことで下手に異常性を出せば異端扱いされかねないか。

「そうか、特別に許可しよう」

さて、荷物の整理もしなければいけないか。

「ああ、あと・・・」

「なんだ・・・」

人が折角耳寄りな情報を教えようと思っているのに、流石にその目はひどいな。

「王の目的は、この学園内の異常な人間を見つける事だ。貴様らも噂程度で構わないから聞いた際は献上することを許そう。」

さて、荷物の整理・・・古賀さんの異常駆動で何とかするか・・・

side 刹那

突然だった、体が彼女の言葉にただ従った、自分の体が自分の脳からの命令よりも彼女の命令を優先した。それでも神鳴流の剣士、身体の修行だけではなく精神の修行もやってきた、もちろんそれには洗脳や催眠術もあった、なのに従った。しかも彼女の言葉には魔力も感じられなかった。

「なんだったんだ。」

「彼女の事かい？」

隣に居る真名が聞く、どうやら思考が口に出ていたらしい。

「真名はあれが何か分かるか？」

「いや、あれは私も始めて見た。」

龍宮真名、裏でも有名な狙撃手で世界中の戦争を経験している。
そんな彼女も分らないのか。

そんな事を考えていたら学生寮に到着した、今頃不知火長袖は荷物整理でもしているだろう。しかし私は男子禁制の寮に居てはならないであろう人物を見つけた。

「刹那君、真名君」

「高畑先生。」

私たちの担任であり、N G O 団体内にある魔法使いの団体、悠久の風に所属している高畑先生だった。

第二話 異常者、転入（後書き）

言い訳の時間です。

まあ、えつと早速異常無双でした。

王土くんの電磁波はさすがですね、あと長袖は基本科学者風の性格で公夜は中身も哀川さんでした。

そして使う異常ごとにキャラが変わります

第三話 第一実験 開始

side 刹那

「彼女はとうだった？」

私、桜咲刹那と隣にいる龍宮真名の担任教師である高畑先生はそう言った。

先生の顔はいつもの顔ではなく、魔法使いとしての先生の顔だった。

「とうだった、とは？」

真名が言う、真名は傭兵という職業柄、先生だからといってベラベラ話すというわけにはいかないのだろう、私も先生の発言には疑問を持ったので特に言及はしなかった。

「いや、ちょっとね……」

はぐらかす先生、何も言わなくても何かあることくらいはわかった、隣の真名の顔にも笑みが見えた。

だが、私たちに言わないとなると、私たちに警戒させるほどの人物ではないのか、それとも……私たちが関与できないほどの存在なのか。

「そうですね、彼女は異常な人間を探していると言っていましたよ。」

真名は言った、それは親切心なのか、彼女が良くも悪くも警戒す

るに値する人物とわかった故の礼のつもりなのかもしれない。

「異常………わかった、君たちも早く帰るといいよ。」

「わかったよ先生」

「失礼します。」

高畑先生の顔は、最後まで思案顔だった。

「ふう」

「刹那、あれはなんだ」

私たちは寮の自室に戻った、ついでに言うと私と真名はルームメイトである。

「魔法でなければ陰陽道のようなものでもない、そもそもあの女からは何も感じなかった」

「いや、私は感じた」

そう、私は感じた。名立たる使い手から感じられる、だが今まで出会った誰よりも絶対的な。

「威圧感」

「威圧感…それは私も感じた、しかし、それとあの身体操作？のようなものとどう関係が。」

「だ、だがあれしかなかった、あの異常な、異常すぎる威圧感に！……………ん？」

もしかして、彼女が探してる人間は

「「異常……………」」

ピンポーン

「どうも、今日から隣に越してきた不知火です、クラスメイトとしてもですが、お隣としてもよろしく。」

インターホンの能天気な音と同時に入ってきた声は、件の女、不知火長袖だった。

side 公夜

また、こいつらかよ。

「……………」

「やあ、さつき会ったね、龍宮真名だ、こっちは桜咲刹那よろし

く。」

なんだこの扱いの差は、そんなに『言葉の重み』が地雷だったのかよ。

「問題ありません、自己紹介のあれは異常を探すためだったので、こちらで強引でした。」

「異常……あなたの言う異常とは、何を意味するんだ？」

そうか、あんまり異常異常言ってもわけわかんないわな、しかしここで言っているものか、ちよつとまずいな。しっかし桜咲もそう嫌悪感ビンビンで話されても困るな、俺じゃなくてもわかるだろ。

「なんでもいいから異常な人物、勉強ができすぎたり、運動ができすぎたり才能がありすぎてキモチワルイ人間です。」

「気持ち悪い……か、わからないが勉強ができすぎたり、運動ができすぎるやつはいるな。」

おつ、いるか！じじいが言ってた異常がこうも簡単に見つかると思わねえが……

「うちのクラスの超鈴音と古菲だ。超は文武両道が具現化したような奴で、古菲は年齢と実力が噛み合っていないほどの格闘家だ。」

あの中国人コンビか、俺の圧力に反応した奴だな。
早速明日話しかけるか。

「こっちの格好は初めてか。」

俺、不知火公夜は不知火長袖ではなく不知火公夜として、麻帆良学園にいる。

やっぱり、ねーさんの格好はきついな、あれだけ食ったカロリーはどこ行っただよ。

おお、なんかすごい殺気が実家から。
まあいいや、ねーさんは受験だし。

「うおおおおお！古菲部長やつぱTUEEEEEEE!!!」

俺の目当ての名前が叫ばれる、その声が聞こえた方を見ると人だかりができていて、その中心に

「古菲部長ねえ……」

制服を着て、中国拳法の構えをとっている古菲がいた。

俺は威圧感を出しながら、近づく。

（何アルか！？この威圧感！？）

その場にいた誰よりも早く威圧感に気付いた古菲は威圧感の出所を探し、遅れて気付いたギャラリーはただその威圧感を恐れ、モーセの前の海のように横へ退いていく、そして俺と古菲の間に立つ人間はいなくなった。

「お前、ただ者じゃないアルネ・・・・・・・・」

向こうも察したようで、再び構える。

先程まで騒いでいたギャラリーも黙った。

そして俺は、異常な反射神経を持って、異常な駆動力を駆使し

「実験を開始します！！！」

第一実験開始 被験者古菲

第三話 第一実験 開始（後書き）

やっぱり口癖は必要でしょう。

刀語を読んだ自分は考えました、うにー、戯言、傑作、ちえりお、そして主人公は「実験を開始します」です。どこかの殺人鬼一賊が原型なのはご愛敬。

個人的に好きな口癖は子荻の口癖です。

第四話 第一実験、終了

Side out

「・・・・・・・・・・」

「くっ!!」

早朝の麻帆良学園、その中心ではある実験が行われていた。

被験者は古菲、実験内容は古菲が異常か特別の判断、さらに異常の場合はその異常性の分析。

本来異常性の判断は、サイコロ占いで事足りるが、被験者の異常性は格闘能力に関係しているので、不知火公夜の自己判断により、実験を戦闘に変更。

（報告書はこんなものか・・・・）

不知火公夜はこんな事を考えていた、麻帆良学園に置いてトップクラスの实力を持つ古菲との戦闘中にだ。

現在公夜と古菲はよほどの実力者でない限り目視できないほどのスピードで殴り合っていた、といっても殴るのは公夜、それを防ぐのは古菲である、今のところ古菲はろくに攻撃できていない。それは古菲が弱いのではなく、ただ、公夜が異常なだけだった。

（しかし・・・・判断に困る。）

公夜の脳内は古菲が異常か特別かの判断で占拠されていた。戦闘中にこのようなことが可能なのは、ひとえに公夜の異常性故

だった。

高千穂仕種の反射神経、オートパイロットその過剰な反射神経の前には誰も公夜に触れることが出来ない。

古賀いたみの異常駆動、壁を軽々と突き破る並はずれた身体能力と回復力の前には、誰も公夜の攻撃を防ぎきることが出来ない。

行橋未造の受信感度、機械のみならず人間からも発せられる微弱な電磁波を感じるその感受性の前には、誰も公夜に感情を偽ることが出来ない。

だが、公夜はこれら異常性を使っていなかった。

オートパイロット使っている異常性は反射神経のみ、いくら異常な異常性を持つ公夜でも、その三つを同時に使いこなすのは疲労がひどかった。

「速い！？いや早いアルカ！？」

古菲は実力の一端しか出していない公夜の攻撃を何とか防いでいた、と言っても公夜が実験の本義のため手を抜いているだけだが。

（努力を伴った特別か、弱々しい異常か・・・）

それが公夜の古菲の異常さを決めかねる要素だった。

古菲は強い、だが異常な強さも言い難い、これほどの強さならば最上位の特別が最上の努力を積み特スペシャルに何とか届くだろう。

「もう時間だな・・・」

公夜はぼつりと呟き。

『喰らえ』

そして異常者の回し蹴りが、古菲に直撃した。

「グアッ！！！」

そして、そのままギャラリーに古菲は突っ込んだ。

クッションの代わりとなったギャラリーの中心で古菲はぐったりしていたが、ヨロヨロと立ち上がる。

「ちょ、ちょっと油断したアルヨ……ゲホッ！！そろそろ本気を……」

蹴られた横腹を押さえながら古菲は公夜に近づく。

「ふざけるな、そのようなヨロヨロで油断も本気もあるか。そして真の強者が油断などするものか」

「そうだよ、古菲君」

倒れそうな古菲を支えたのは古菲と公夜ながそでの担任である高畑であった。

しかし、その教師あらざる目は公夜に向けていた。

「君はうちの生徒じゃないね？」

「ああ、俺はつよい奴と戦いたくてな、ああ、アンタは興味ねえな。」

公夜は強気な態度で答える。

「そうかい、でもちよつと話を聞かせてもらえないかな？」

タカミチは自力で立てるまでは回復した古菲から手を話し、無言と笑顔の圧力を出しながら公夜に近づいていく、しかしそんな圧力は王土で慣れている公夜は

『……………ヒザマスケ 跪け』

おつ 暴君が現れた。

そして、ギャラリー、古菲、民となった。

ただ唯一、タカミチだけ、その場で身動きが取れなくなるだけだった。

「王であるこの王の退場オレに跪かない無礼は今回は不問にしてやろう。（あのおっさん、結構耐えたな……………」

立ちつくすタカミチの横を軽々と通りすぎ、そのまま去っていった。そこに居合わせた全員が公夜が居なくなるまで跪く体勢を直せず、公夜が何処に行ったかは誰も分からなかった。

実験結果

古菲 スペシャル 特別 種類 格闘センス・運動神経

考察 実力は異常に匹敵、しかし古菲の体には見えるだけで大量の傷が見られ、そこから修行による実力である。本来努力も才能も環境も関係なく結果を出す異常とは違うと判断、しかし普通と判断するには有能すぎるので、よって特別と決定。スペシャル

実験最中に第三者の介入が見られたが、実験担当者が処理。

「次は超鈴音か・・・」

第二実験、被験者超鈴音

第四話 第一実験、終了（後書き）

古菲、破れるの巻。

古菲を異常にするか特別にするか、非常に迷いました。

しかしめだかなどを除いた大抵の異常者は自分の異常性にかまけて訓練を怠りますが、古菲は努力を怠らない、それが特別の鍵となりました。しかし、実力は異常と十分戦えます。

第五話 第二実験

side out

「古、随分やられたようだな。」

「まっ、真名……どうしてそれを……知ってるアルカ？」

麻帆良学園の3・Aの一室

早朝の公夜の実験^{せんとく}を終えた古菲と、いまだ長袖を調べている真名は話していた。

先程の実験は広大な麻帆良学園にスポンジが水を吸うように浸透し、今現在も新聞部並びに多くの格闘部が公夜を探している。

「学園中で有名だぞ？ウルティマホラ優勝者の古菲部長が他校の生徒に負けた、と。」

「あ、あれは油断してたネ、……でも負けは負け、何時か会ったらリベンジするヨ！！」

その場でシャドーを始める古菲、古菲にとってはウルティマホラ優勝者などの名誉はどうでもいいようだ。それを見て微笑む真名。一度、名誉に味を占めた人間は人が変わったように名誉に固執する。しかし古菲は違った。

「安心したよ、まあ古はこういう事で落ち込むタイプとは思ってなかったが。」

「それよりも、古菲さんを倒した人です！」

真名の背後から出てきたのは刹那、このクラスで最も長袖を警戒していると言ってもいい人物である。

「あゝあ、あの男のことは知らないアルヨ、名前も知らないし、でも実力は確かだったアルヨ。」

「男？」

「ああ、古菲を倒したのは男だ。聞いてなかったのか？」

直情的な刹那に冷静な真名が言う。

「・・・・・・・・・・という事は」

刹那は綾瀬夕映と哲学について熱く語り合っている長袖を見る。

「女装・・・・・・・・・・？」

「いや、男装の線も・・・・・・・・。」

骨格レベルで偽装をする公夜の変装術にはさすがの真名も気付かなかった。

side 公夜

現在放課後、今俺、不知火公夜は麻帆良工業大学の前にいる。
まあ、今から超鈴音を実験するんだが。

こりゃ異常だろ、今朝の実験の後から超鈴音の噂を聞いたが十分だ。

麻帆良の天才頭脳、量子学研究会会長、超包子オーナー……

万能ねえ……………。

まあ、事の真偽は今から確かめるが。

そう言いながら大学に入っていく俺だった。
ホントは強行突破の方が好きなんだけどなあ。

s i d e o u t

麻帆良大学の一室に超鈴音、葉加瀬聡美、絡繰茶々丸はいた。

「異常ナシ、お疲れヨ茶々丸。」

「はい、超。」

「それじゃ、今度は来月」の前に今から実験だ」

そこに来たのは異常者、不知火公夜。

「超、葉加瀬！」

「へえ……………」

この三人の中で最も戦闘力のある茶々丸が、二人を庇うように立つ。

もつとも茶々丸は今だ公夜が知らない魔法と、科学のハイブリットであり格闘能を含めた戦闘力は達人クラスである。しかし、公夜の目を付けたところは他にあった。

「お前、面白い電^{もの}磁波出してんな。お前も調べてやるよ。」

「あなたは古を倒した……………」

超は茶々丸に守られながら、持っていた記憶から唯一の該当要素を探り当てた。

「ハハッ！さっすが俺、もう有名人の仲間入りか？まあ、ありや俺の裏技を使ったから倒したって言われると心がズキズキ痛んじまうよ。」

「茶々丸、注意するヨ、相手はあの古を倒した男ネ」

「だからア、別に倒してないってのに…………まあとりあえず……………実験を開始します。」

その瞬間、研究室の電子機器、蛍光灯からスーパーコンピュータまでもが作動した。

そして、作動した電子機器のデータは全て公夜の受信によって読み取られていく。触れてもいない電子機器の画面に大量の文字が羅

列され様子は三人にとって理解不能の領域だった。

「これは!?!?」

「フム……………ああ?」

ぶつん、と先ほどまでの電子機器が落ちた。

「おいおい、ここいらの技術全部お前等の自作か? たしかにこの大学の設備は流石だったけどよ、この技術力は異常だろ。まず」

パチンと公夜は指をはじく。すると一つのコンピューターが作動し、三人の視線を集める。

「これを設計したのは貴様らか? これは最近の技術力じゃ開発不能だろう?」

パチンと、二度目、すると先ほどまで出ていたコンピューターが落ち、もう一つのコンピューターが作動した。そして、その画面にも文字が羅列されていく。その内容は、超が今ままで書き続けた論文だ。

「この論文、博士号だつて余裕で取れるレベルの内容だ。」

三人は文字通り開いた口がふさがら無かった。

しかし、それは公夜の行動もだが、公夜が二つ目に起動したコンピューターを含め、何重にもプロテクトされたコンピューターが全て起動して、隅々まで調べられたからだった。

「まあいい、この技術力の秘密を解明しないことには、確定は出

来ないか。」

公夜はすたすと茶々丸に近づいていき、茶々丸の頭を掴む。これは茶々丸のデータを読み取るため、この部屋でもっとも複雑で難解な機械は茶々丸であり、そのため先ほどの一斉起動でも茶々丸だけはその対象外とした。

「さて……………」

「キヤアアアア！！！」

いきなりのハッキングと言える公夜の電磁波に茶々丸は悲鳴を上げる。

しかし、公夜は茶々丸が生徒として、自分のクラスに通っていることを知っているので、あまり手荒なまねはしなかった。

しかし、そんなことを分かっていない二人が居た。

「茶々丸！！！」

武道の達人である超は拳で、研究だけの葉加瀬は巨大ロボアームで公夜を引きはがそうとする。
しかし

「^{ドケ}退け」

二人は吹き飛んだ、ように後退した。

ロボアームはヴヴヴと人を不安にさせる音を発し、そのまま直らぬ機械になった。

「このエネルギー機構は……魔法……結界……関東魔法協

会・・・吸血鬼!？」

そして、暴君は知ってしまった、この世界の裏に、真実に、踏み入った。

「ハハハハハハ!! ！そうかそうか!! ！あの老いぼれ!! ！こんな黙ってヤガツたな!! ！」

茶々丸は、俯いたまま、震えている。いや、茶々丸だけじゃない、超、葉加瀬までもが公夜の豹変に畏れを抱いている。

「実験はしゅーりょーだ。俺の探しているのが見つかった。」

そして、扉へ向かいながら。

「次の実験はお前のご主人様だ。」

力尽きた茶々丸には、この言葉しか聞き取れなかった。

実験結果（仮）

超鈴音 アブノーマル 異常 種類 科学知識全般

考察 一般性との風評、そして本人が使用する電子機器及びそれを使いこなす技術から決定。

しかし、電子機器が現代技術では設計が不可能の可能性有り、よって仮

葉加瀬聡美 スペシャル 特別 種類 科学技術

考察 超鈴音の風評カリスマ性からノーマークだったが、超鈴音

の実験の最中、技術開発者にこの人物　　の名が大量に見え、超に及ばずとも技術者としては特別と決定
しかし、上記と同じ理由によって仮

「吸血鬼であり魔法使い、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル、これは流石に裏の六人の力が必要かあ？」

第三実験、被験者エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

第五話 第二実験（後書き）

お久しぶりです。

暑いですね。休みという重りを解き放った学業がキングダムゾン
ばりに色々ぶつ飛ばしてホント、忙しいです。

さて、今回は異常者、魔法を知るの巻でした。

次回は異常者、魔法を学ぶ、異常者、魔法を使う、異常者、吸血鬼
に接触するの三本です。

第六話 吸血鬼と異常者

side 公夜

幸運にも今日は日曜日、という休日の幸福と月曜日の前日の不幸を兼ねそなえる日なのだ。

「あのガイノイドをデータだところら辺かねえ？」

回りは木木木、森の中でいいんだが。

吸血鬼、魔法使い、これがじじいの言ってた、まだ見ぬ異常と繋がるのはほぼ確定だ。

データによれば、あのガイノイドの主でもあるエヴァンジェリンは600歳、この時点で異常だな、存在自体が魔法を証明してると言ってもいいアイツなら、実験ついでにそっちの情報も貰っていくか。

とかなんとか考えてる間に、ログハウスらしき建物が見えてきた。

インターホンを押す。

棺桶で寝てるから無反応かと思ったが、予想に反してダダダンと元気な足音が扉越しに迫ってくる。

そういえば、授業には出席してたか。

「茶々丸ーーーー！！！！昨日一日何処にいて……………て、貴様は誰だ！？」

「そーういや、茶々丸つつたなあのガイノイド、アイツはいま超鈴音のここでおねんねしてるぜ？」

お、驚いてるな、確かにあのガイノイドかなり高性能だったからな

「貴様……何が目的だ？」

おお、中々の殺気、まあ脅しの殺気じゃ宗像の殺気にはかなわねえ。

「まあまあいいじゃねえか、茶々丸は別に問題ねえよ。」

「貴様ズカズカ入ってくるな！！」

そんなの知らね

お、いいソファー

「俺が聞きたいのはな、魔法の事。教えてくれたら血もやるぜ？」

「魔法？私の魔法書が目当てか？」

おお、魔法書なんてのもあるのか、こりゃ本格的にファンタジーだな。

「違う違う、俺は魔法を昨日知ったんだって、だからあ、学園で一番魔法に詳しいアンタに聞きたいんだよ」

「ほう……私に教えを乞うか……中々良い選択だ。」

エヴァンジェリンは立ち上がり、手で俺を呼ぶ。

「魔法の事を知ったのならこの闇の福音の悪評も耳にしただろう？それを聞きながら私の元に訪れる、か……気に入った、ついてこい。」

まあ、悪評も知ったけど、従者様の好評もだからな……ま、いいか。

「ああ、その人形も持ってこい。そのいかにも性悪な人形だ。」

「ケケケ、ゴ主人キツイゼ」

ああ？この部屋はこいつ以外電磁波は感じねえぞ。

「コツチダ」

目の前で人形がしゃべってる、スピーカーか何かなら電磁波を感じるがそんな物はない……流石というか何というか……俺はこの人形の頭を掴んでエヴァンジェリンの後を追った。

「この中から、城のミニチュアがあるガラスの球体を探せ。」

「はあ？このガラクタの中からかよ！！」

地下に行くと俺の身長をゆうに超すがらくたの山、いや、まだただのがらくたの山ならいいんだ。

問題はその素材、主に木やガラスと言ったいかにも魔法使いながらくただ、金属なら電磁波を使えば何とかだったが。

「ちつ、しゃーねーな。」

搜索開始。

三十分経過。

搜索終了。

「で、これをどうするんだよ?」

「こう言うのは茶々丸の仕事なんだが………よし、これでいいか。」

エヴァンジェリンがあのだら球体を台座に置いて、その回りに魔法陣が現れる。

しかしどうする気だ?

「この魔法陣の上に乗れ。」

「ああ………うおー!」

世界が変わった。

side out

「ここなら私も本気で行けるな、おい、早く来い。」

公夜の視界に広がっているのは海と城、絶海の孤島と言っても遜色ないほど城以外には海しかない、その城に続く橋を渡りながら公夜は未知の魔法を目の当たりにした。その驚いてる様子を背にエヴァンジェリンは自分の城の書庫へ向かう。

「

「お前は魔法については全く知らないんだっとな、じゃあこれだ。

「これは……ラテン語か？」

公夜に渡された本は初心者用魔法教本

「しかも魔法学校で使われてる奴なんかじゃない、真正正銘の魔法書だ。子供用に作られた倫理感まみれの教本なんかじゃないぞ、お前は現実的なほうがいいだろ。」

「……上等だ。」

「それに一通り、魔法使いとしての常識を覚えてこい、ラテン語は図書館島にでも行けば翻訳があるだろうから問題な「こんなものか、おーいエヴァンジェリン！次は実用書だ、あと杖もな！」はあ？」

「貴様！！もう読み終わったのか！？」

「まあ、データとかにしてあればもつと速かったけどな。」

公夜は国語辞典ほどの教本を読み終えた、それこそパラパラ漫画を読むようなスピードで。

確かにこれほどのスピードで読む人は小学生にもいる、しかしラ

テン語で、しかも魔法という日常からかけ離れた内容を読むことは大きく違う。しかし、ラテン語を読めることも速読技能も黒神まぐろから指導された技能でしかなかった。

「クツ、なんなのだ貴様は。」

ブツブツ言いながらもエヴァは何十メートルもある本棚から、魔法で一冊の本と、先に星をかたどったおもちゃのような杖を取り出した。本は先ほどよりも分厚く、その本に詰められた知識の重厚さが伝わるようだった。

「おー、さっすが実用書、レベルたっかー、魔法使いっぽいな。えーと、教本に書いてあったのは・・・火よ灯れ！！」

ボツと公夜が持つ杖に灯が灯る、元々一発で成功すること自体が異常、しかし、さらに異常なのはその火にあった。

「おい！！！！コツチに向けるな！！それじゃ火炎放射器だ！！」

「ハハハハハハハハ！！！！！！」

「ナンドコリヤ・・・・・・」

それは先ほどまでのシリアスな空気を消し去るような時間だった。

「マスター！！！！！！」

しかし、その時間も壊された。

第六話 吸血鬼と異常者（後書き）

今回は公夜が色々やっちゃいました。

しかし、いきなり魔法が使えちゃってるのは異常者でいいとして、何故エヴァがあそこまでしてくれたのかは彼の異常故です。

第七話 第三実験開始

side out

「マスター!!」

茶々丸は先ほどまで何処にいたのか？

その答えは麻帆良大学工学部、である、機械と魔法のハイブリットであるその体を公夜によって隅々まで調べられた茶々丸は、身体の異常を創造主である超と共に調べていた。

そして、公夜の標的であり自分の主でもあるエヴァンジェリンの元へ向かうと、自分の姉すらもおらず地下に行くとガラクタに埋もれていたはずの別荘が作動していた。

「マスター！その男は危険です！！今すぐ離れて!!」

「ど、どうした茶々丸！？そんなに慌てて。それにこの男は・・・」

「

そこでエヴァンジェリンの思考は停止した。

そう、よく考えるとエヴァンジェリンも公夜の事は知らない、名前も目的も実力も。

ここに連れ込んだのはエヴァンジェリンがこの男の態度と存在感になにかを感じ、それに流されたからだった。

だが、その流れから脱した——エヴァは明確に公夜への不信任を持った。

「まさか貴様・・・本当に」

ここまでか・・・と公夜は考えた。

茶々丸のデータを見る限りこの二人の主従関係はそう簡単に崩れない、公夜がどう言ってもこのガイノイドが言うことをエヴァンジェリンは信じるだろう。

その時点で四面楚歌。

「別にさっき言ったことは嘘じゃねえよ。向こうさんが勝手に危害と認識したんだろう?」

それを言った公夜はもう書庫を後にしようとしていた。先ほどの魔法書と杖と持って。

「何時の間に!」?

「俺の動きにはついてけねえよ。じゃあな、本は何時か返しに――
ああ?」

その時、公夜の軽々とした足取りは、一転重りを付けられたかの用に停止した、勿論、その足には重りなどない、足を止めたのは公夜自身の意志だ。

それでは何故公夜は足を止めたのか、それはエヴァンジェリンから発せられる、電磁波にあった。

「どうした?行かないのか?んん?」

エヴァンジェリンはニヤニヤと笑みを浮かべ、急に立ち止まった公夜に声を掛ける。

「てめえ、その笑い方は俺のモンなのに、……………なんか考えてんな?」

「ククク、よく気付いたな。」

ゆっくり、一歩一歩と公夜に歩み寄っていく。

「そう、この私の別荘はその空間に入ってから一日、二十四時間以内は出ることはできない。」

「へえ……逆竜宮城か。」

「クククク、強がりとは止めて貴様の事について教えて貰おうじやないか？なあと、時間はたっぷりある、貴様の血を全て吸い取る位にな。」

いつの間にか公夜は囲まれていた、前方にエヴァンジェリン、後方に茶々丸とチャチャゼロが正三角形を描くように。その中心で佇む公夜。

「八八八八八八八八！！！！！」

そして、笑い出した。

「いいねいいねいいね……ここまで絶体絶命なのはひさしぶり・
・・・・らしいんだ。」

そして、二人と一体は気付いた、公夜の髪の毛が、伸びていた。細胞分裂の常識を無視した異常な伸び方で。

「そんなに知りたいなら体に聞いてみな、
 なあに時
 間はたっぷりある、実験が終わる位にな。」

そしてシニカルな笑みを浮かべ、公夜は宣言した。

「実験を開始します!!!」

第三実験、被験者エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

第七話 第三実験開始（後書き）

さて、とうとう始まってしまいました第三実験。そして登場髪々の
黄昏原作ではもうほとんど触手兼衝撃吸収剤
再登場するんですかねえ、裏の六人？

第八話 第三実験、緊急終了

side out

そして、異常と異形の戦いは始まった。
先手は異形

「あん？こりや……」

「茶々丸、チャチャゼロ、手を出すな。魔法使いでもないペーペーに魔法を使つてもただの弱い者虐めだろ？ホラ、どうした？」

公夜の周辺には、目視も困難な糸が支配していた。

エヴァンジェリン——人形使い——の糸は人形だけでなく、敵をも支配する。公夜から一定の距離を置いた糸は、タイミングを見計らっているかのようにピクリとも動かない。

そして、公夜の周辺360°に待機していた糸は一斉に公夜に巻き付いた。

「はッ」

ずてっ、とエヴァンジェリンは地面と熱い抱擁をした。

「ぐ……貴様……」

両手から地面にダイブしたエヴァは起きあがろうとしない、本来公夜を拘束するはずだった両手を動かすことが出来ないからである。

「そんなベラベラしゃべってる暇があるならさっさと行動しろっつーの、この状況、お前の手が俺の体を支配したと言っていいけど

な、俺の体がお前の手を支配したとも言えるのよ。」

エヴァンジェリンはいとも簡単に公夜に主導権を握られた。
だが、それだけで終わる公夜ではない。

「今度はコッチを見せてやるよ。」

公夜は両腕を大きく広げた、すると公夜とは対照的にエヴァの両腕は体にぴったりと閉じられ、倒れている姿も相まって芋虫の様な格好になった。

流石にエヴァも自分の惨めな格好に

「ぐっ、貴様何を！？」

「お前のモノマネだよ、ただちよつとばかりシメエと得物が違うのさ。」

エヴァは気付く、自分を拘束する糸——髪を、それはエヴァの糸よりもずっと細く強く、しなやかである。

トリックオアトリートメント

「髪々の黄昏、その異常な髪は伸縮自在、切断には弱くともその強靱さは十分異らしいんだ。」

公夜は地面にべったりとつくほど伸びきった髪を隠し持っていた日本刀でばっさりと切り落とした。

流石に量、質ともに異常な毛髪は公夜の頭部に少なからず負担をかけていた、

「やっとすっきりしたか。」

わけでもなく、ただ鬱陶しかつただけの様だ。

「マスター!!」

「言イツケハ破ラセテモラウゼ!」

この現状を見て何も動かない従者はいない。

その例に漏れないチャチャゼロ、茶々丸は首切り包丁と体中に仕込んだ武器を手に公夜に向かう。

「貴様らは踊し。」

と言った

「なっ!?!」

その瞬間茶々丸は自分の姉を襲った。

「イモウト!何スルンダヨ!?!」

「す、すいません姉さん!でも、体が――」

この中で最も公夜と相性が悪い者はなんと言ってもガイノイドである茶々丸である。工学部でも見られたように茶々丸のような機械は人間以上に電気、公夜の電磁波の影響をダイレクトに受けたのだ。

「くつくつく、吸血鬼にオーバーテクノロジーのガイノイド、そして自立起動する人形」

このような状況でも公夜は笑う。
今まで《ふつう》の世界から未知の^{いじょう}世界への侵入、

絶体絶命の危機でも
絶対異常の敵でも
公夜は笑い叫んだ。

「この城はフラスコと化す!!」

南国の城は純白の戦場と化していた。
飛び交う四つの影と数多の光。

影の正体は

異常者不知火公夜、

吸血鬼エヴァンジェリン、

殺戮人形チャチャゼロ、

吸血鬼の従者絡繰茶々丸。

その四つの影が、二つずつ飛び交っていた。

エヴァンジェリンとチャチャゼロ

公夜と茶々丸

「マスター!! 私に構わず破壊して下さい!!! 超に頼めば修理は出来ます!!」

「バカを言うな!! 従者を破壊する主が何処にいる!？」

「御主人! 妹ヲ止メテル間ニサツサト殺セ!!」

「八八八八八八八八！！！！」

三者三樣いや、この場合は四者四様の思考が発言に現れる。

「クツ！こいつ先読みでも出来るのか！？さっきから魔法が全く当たらん！？」

公夜は今までで最も多くの異常を発揮している。

感受性、電磁波、駆動性、自動操縦、そして髪々の黄昏

「おっと！ ゆっくり魔法書を読む暇もねえ！」

公夜は必死でも余裕でもない様子でにエヴァの猛攻をかわし続ける。

エヴァが魔法を放つ際の電磁波で大まかな行動を予測しつつ、公夜が発する電磁波でエヴァの脳の認識をずらし、自動操縦と異常駆動で高速の回避を実現している。

公夜の近くには、公夜に操られた茶々丸とチャチャゼロがいて、
広範囲攻撃を放てない。

だが、遅くても確実に、明確に公夜は魔法書を理解していた。

元々電磁波を主な武器とする公夜に対して電気信号で動く生物やロボットには公夜は天敵である。

つまり本来、ここで茶々丸を取り押さえるのは合気柔術を駆使するエヴァで、公夜の相手は公夜にとつての未知のエネルギー魔力で駆動するチャチャゼロであるべきであつたが、しかしそのようなことは知らないエヴァだつた。

「なるほど。」

ぱたん、と公夜は本を閉じた。そして、おもちゃのような杖をエヴァに構えた。

「え〜と、魔法の射手、光の101矢？」

101本の閃光が駆けた。

いきなりの魔法行使にエヴァはとつさに障壁を出したが、それを吹き飛ばすのが異常者の魔法であり。

光の奔流はエヴァを巻き込み城の壁を打ち崩した。

「こりやすげえな………おもちゃの鉄砲からミサイルが出やがった。」

「マスター!!」

城壁を貫通したエヴァは宙に浮きながら戻ってくる。

「ククククククク、火炎放射器の次は弾幕か………ハハハハハハ!!これはナギに匹敵する天才だ!!!!さあ!!!!もつとやろう!!!!」

「イヤだ。」
『ヒザマスケ 跪け』

暴君は再び現れた。ただ、庶民は現れなかった。

エヴァは公夜の『言葉の重み』を耐え、茶々丸はチャチャゼロと戦っているままだった。

だが、エヴァは自由に動けるわけではなくそこに立ちつくすのみ。

「このまま、一晚。俺の『言葉』とお前の『意志』どっちが勝つ

か勝負だ。」

先ほどのまでの激しい戦いから一転、激しさは水面下に落ち、静かすぎる戦いが始まった。

「エヴァに一応言っておいた方がいいな。」

ログハウス地下、正確には地下にある別荘でエヴァと公夜が静かに戦っている地上で、タカミチは呟いた。

「おい、エヴァ？」

一応ノックしたが、全く反応がない。タカミチは仕方なく旧知の間柄であるエヴァの家に無断で入るが人の気配は全くない、しかしあのエヴァが学校や部活、超包子以外で外出するのは珍しい、と、タカミチは外出している可能性を頭から消した。そして考えられるもう一つ可能性を頭に浮かべる。

「まさか。」

タカミチの視線は床、そしてその下の地下^{せんじょう}へと向けられた。

「ふあゝ」

別荘の中で日は進み、もうすぐ数時間が過ぎようとしていた。相も変わらずエヴァは『言葉の重み』という名の電磁波に拘束され、茶々丸とチャチャゼロは戦い縛られていた。そしてまた、公夜もまた、ある物によって身動きが取れなかった。それは

「眠」

眠気であつた。

だが、この世にはまだ永久機関は存在しない、栄養素も何時かは切れる。精神力も何時かは切れる。燃料も、何時かは切れる。

ドサと、何か重い物が倒れる音がした。その倒れた物はエヴァとチャチャゼロには容易に予想でき、公夜は眠気で細くなる目で認識した。

「ケケケケケ、ヤットゼンマイが切レタ力。」

チャチャゼロはゼンマイ、つまり魔力の供給が切れ力尽きた妹の上で自分の身の丈ほどある首切り包丁を振り回しながら言う。

まさに形勢逆転、眠気で実力を出し切れない公夜と、公夜の電磁波が全く効かない生粋の魔法人形チャチャゼロ。

エヴァが身動きが出来なくても、この差は歴然。

「マア、ココマデヨクヤツタゼ？ナルベク楽二殺シエアルヨ」

「魔力が燃料かよ！！！！」

眠気を振り払いながら走る公夜をケタケタケタケタと笑いながら
チャチャゼロは追う、いくら異常駆動といえ、チャチャゼロも魔力
を十分に発揮し差は中々広まらない。広まるどころか、だんだんと
狭まる。

それによつて近づく首切り包丁の振るう音、チャチャゼロが走り
寄つてくる音、殺戮人形の笑い声。

その三つの音は狂想曲の如く奏でられる。

そして疲労までもが公夜の足枷になり、チャチャゼロの間合いに
エモノが入った。それに反応して機械よりも正確に冷酷に無情に、
首切り包丁が振り下ろされる。

寸前に――

「エヴァー!!」

今までの誰よりも年季の入った声、そして驚愕が入り交じった音。
タカミチの声が響いた。

『チャチャゼロを止める!!!!!!!!!!』

「お前は!!」――

公夜の全力の電磁波は歴戦の勇士であるタカミチをも支配する。
タカミチは自分の意志を180度ねじ曲げ、瞬動術でチャチャゼ
ロを掴み、そのままエヴァの元へと向かった。

「さすが真祖の吸血鬼、エヴァンジェリンA・K・マクダウェル・
……ここまでボロボロになったのはあの人以来だ。誇つていい
ぜ。」

「き……さま……まだ、24時間たってな……」

「クツクツク、」

公夜はエヴァの言葉をあざ笑うかのように出口へと向かう。

「この魔法の空間は中々年季が入ってんだろ？」

魔法陣の周りで目をこすりながら公夜は語りだす。

「魔法だって人間が作った技法だ、何処かにミスはあるし、エラーも存在する。」

なんせ、世界にだってバグはあるんだ。と付け加えて

「そのエラーが何億何千何百何十何万何千何百何十何分の一でも、それを引き当てるのが異常者だ。おれたち」

そして、公夜はこのフラスコから姿を消した。

実験結果（仮）

エヴァンジェリンA・K・マクダウエル アブノーマル 異常 種類 魔法技術

魔力量

考察 魔法使い発覚直後の実験により、判断要素が不足しているが、最強の魔法使いと呼ばれ、恐れられているので異常と判断。しかし、そもそも人間ではないのでフラスコ計画進行の要素は低い。

第八話 第三実験、緊急終了（後書き）

四ヶ月ぶりの投稿なので初めて初見の方も見えるかもしれませんね
今まで読んでいて下さった方々、お待たせしました！！
なんとか定期更新になるようにがんばっていきます

第九話 環境（フラスコ）整備（前書き）

今回はいつも以上の駄文＆短いです。

第九話 環境（フラスコ）整備

Side 公夜

「おはよー！長袖ちゃん！！」

「おはようございます、佐々木さん。」

昨日の実験は疲れた。古賀さんの回復力である程度まで回復したけど『言葉の重み』は当分封印だな。

まあ、魔法の特訓はあれ以降も進めた。一応魔力探知位や魔力隠蔽は出来る様になった。潜在魔力の目安もわかったからな、これで魔力の異常者を捜せる。

「ねえねえ、今日から新しい先生が来るんでしょう？」

え？・・・俺のせいじゃねえよな・・・

「先生来たよ！！」

誰かの言葉で扉に黒板消しをセットしていた者や、インタビューをしようと意気込む者もひとまずは席に座った。

「し、失礼します。・・・う、うわっ！！！！」

扉からは労働基準法を現在進行形で犯しているような先生が来た。まあ、それは問題ない、問題は

「こいつは・・・・・・・・・・」

発見した、エヴァンジェリン、近衛木乃香に続く異常な魔力持ち。あの年齢であの量、十分異常、だがまだ子供、さっきもいきなり魔法使ってるし、俺は構わねえけど立派な魔法使い様達はうるさそうだな。

まあ、観察か。

「そ、それじゃ、全校の連絡から……」

その間に質問やちやほや時間も終わったようで、プリントを配る先生、だがあまりのしどろもどろさにシヨタコン出動。

「あ、ありがとうございます、いいんちゃん、えっと……
・最近、他校の生徒が野良試合を仕掛けてくるので注意って……
ええ!？」

げ、もう広まってやる。

s i d e o u t

「よく集まってくれたの。」

公夜の警戒は表だけではなかった。

「すでに聞いた者にいるかの、例の他校の男の事じゃ。」

世界樹の広場、そこに集まったのは学園長を筆頭にタカミチなどのこの学園に在籍する魔法使い達。

「学園長、その男とは何者なんですか？わざわざ私たちを集めるなんて。まさか、西の刺客ですか？」

「それは僕から説明するよ」

恐らく最も公夜と接触している男、タカミチが説明を引き受ける。

「彼は一般人……だったと言っべきかな？彼はつい昨日魔法使いを知った。」

その言葉に、「なんだ」、「拍子抜けだ」と、あの異常を知らない者達が言う。確かにこの学園の生徒達は何年も魔法に触れていて、昨日今日魔法を知った者に負けるわけがない、その者が異常でなければ。

「だが、彼はその前にもこの学園に足を運び、油断していたとは言え古菲君を倒し、超君の研究室を襲った。」

驚愕している人間をよそに話は紡がれる。

「そして昨日、エヴァンジェリンの家を強襲、魔法書と魔法発動体を強奪した。」

「……………」

無言の返事、しかし意味は確実に伝わった。

「も、もしかして、高畑先生、その包帯って・・・」

「これかい？昨日早速やられたよ」

魔法使い達にはある意味これが最も公夜の恐ろしさを伝えたのだ
った。

「彼は魔法の知識が疎い、しかし何か身体操作の様な物を「あれ
を身体操作なんて考えてる時点でめえらは勝てねえよ」まさか！
！」

全員が声の方向を向く。世界樹の枝に立つその男は悪びれもせず、
堂々と魔法使い達を見下ろしていた

「いい夜だ、魔法使い諸君。」

ズバアとかまいたちが公夜の乗っていた枝をスッパリ切断した。
有無を言わさない無詠唱魔法、普通の人間は真つ二つになっている
だろう、

「いきなりイ！」

だが、それをかわせずして、異常と呼べるだろうか？

「瞬動術！？」

不敵にもこの中で最も魔法に触れて浅い人間が歴戦の魔法使いの
中心に降り立つ。その笑みはシニカルで不敵で無敵で異常だった。

一斉に杖を構える魔法使い達。

「待つんじゃ。」

その魔法使いを割って、この中で最強の魔法使い、近衛近衛工門が先頭に立つ。

「ワシはこの学園の長、近衛近衛工門、少し話出来んかの？」

「え？ムリ。」

「そうか、じゃあまずはお主の名前を……ってなんじゃと！」

「はいはい、お約束をどうも。」

「し、しかしだめかのう？せめてお主の目的くらいは？」

「目的？そうだな……俺の目的はある計画の達成。」

その間も次第に魔法生徒、先生は増え続ける。

「さて」

気付くと公夜の手には対戦車ライフルが二丁、そしてライフルを構えた先は高等部の屋上と時計台。その先には、学園長が保険にと雇った狙撃手が控えていた。だが、殺しのプロを相手にしても公夜は恐れない、むしろ宗像形を知っている公夜にとっては、そのお粗末さに怒りを抱いていた。

「なつてねえ、殺しがなつてねえよ。
もつとスマートにやってみろよ!!」

瞬動術でタカミチと学園長の間割った入る公夜、その背中には魔法の射手が50個滞空している、その25個ずつが二人に向けられ、ライフルは狙撃手に向けられていた。公夜は今、誰よりも学園長とタカミチに近く、この距離と自動操縦の前ではもはや最速を誇った。

「じゃあな、^{ノーマル}普通の魔法使い共」

そのまま、タカミチの影に沈み、とぶん、と音と共に消えた。

「さて、これでわかったね。」

安全が確認され、始めてタカミチは口を開けた。

謎の襲撃者、その圧倒的と言つていい実力を見せつけられた。

公夜の実力、それは魔法の才能や数々の異常性もそうだが、もう一つ、それはその男の強靱なメンタル面だった。昨日今日魔法を知った男が、自分よりもずっと先にいた魔法使いや真祖の吸血鬼を相手取り、無傷で生還する。それをやってのける精神力が恐ろしい。

「彼は急激なスピードで成長している、あれは才能で説明しきれない」

「高畑先生、彼が言っていた計画とは……」

「それもある、僕が計画について調べよう、君たちは警戒をさらに厳重にしてくれ。」

第九話 環境（フラスコ）整備（後書き）

お久しぶりです。

なんだかんだ間を空けてで書いたのがこのようですが
読んで下さっている方、ありがとうございます。

第十話 サイコロ実験、実戦開始

Side out

日は飛んで、春休み。

先日のエヴァとの以降の実験はなく、公夜の行動はネギが図書館島で遭難してる間に魔法書を少々拝借した程度。

公夜の感想から言えば、図書館島こそ異常。サイズは勿論、複雑すぎる構造、何故図書館を迷路、しかも滝や洞窟もある、公夜はこの謎をおそらく元々の建造の目的が他にあると結論付けた。

そして本題。

公夜は昨夜、エヴァンジェリンとネギの戦闘を観察していた。

（あれでネギはほぼ才能、エヴァンジェリンは封印されてるんだから恐ろしい。あの人でも相手出来るかどうか……まあ、問題ないだろうな。）

そんなことを考えながら、公夜はある人物を探していた。

「お、いたいた。」

「なっ！！き……貴様は……」

「え？エ、エヴァンジェリンさん？この人誰ですか？」

目的は観察報告。

早朝から吸血鬼がオープンカフェでお茶という状況にかすかに疑問を持った公夜だが、エヴァが真祖の吸血鬼ということから瞬時にエヴァが日光にあたっても問題ないと判断した。

公夜がそんなことを考えている間、先日のことを思い出し、全力で警戒している者がいた。

「気をつける坊や。こいつは例の他校の生徒だ」

「ええっ!!」

「古菲を倒したって、あの？」

警戒していた者の一人、エヴァは何も知らないネギとその従者に警戒を促す。

「くつくつく、剣呑剣呑、今日何もやり合う気はねえよ、これを返しに来たんだ。」

公夜がオープンカフェのテーブルに場違いすぎるモノを置く。それを見たエヴァは先日の実験を思い出し、苦虫を噛み潰した顔になる。

「き、貴様、いけしゃあしゃあと……」

テーブルに置かれたのは、先日公夜がエヴァから拝借、もとい強奪した魔法書である。

「また来るって言ってなかったけ？まあいいじゃねえか、怪我も治ってるっばいし。」

なでなで「するなー!!」

公夜の手を払いのけた、エヴァは羞恥により顔を紅潮させながら叫んだ。

「貴様の目的は何なんだ！？この学園を敵に回すと言うことは、この国の半分の魔法使いを敵に回すと言うことだぞ！」

「たかが日本の半分？俺の味方、いや、太鼓持ちは世界だ。」

「……………は？」

「いいや、ただの戯言だ……………まあいいや、教えてやるよ、俺の目的。」

そしてテーブルの最後の椅子に堂々と座り、公夜は懐から六つのサイコロを取り出し、。

「この世には三種類の人間がいる、ノーマル普通、スペシャル特別、そして俺が探している……………異常だ。」

「最近、うわさになってる異常か……………あの噂の元は貴様だったのか。」

現在麻帆良学園を駆け巡る噂、『天才にはその上が存在し、それは鬼才、秀才、天才の域を超えた人間である』というものだ。

「俺が探しているのは、まだ見ぬ異常者だ。」

「でも、そんなのどうやって見つけるのよ？」

ポンポン進んでいく話にやっと追いついた明日菜は、公夜以外の

者が持つ疑問を代表して問う。

「そこで……これだよ。」

公夜は明日菜の疑問に答えるように、サイコロを振った。

「な、何よコレ!？」

声を上げた明日菜を含めた公夜以外が目を見開く。
唯一平然としてその様子を見る公夜は、言った。

「俺がサイコロを投げるとな……サイコロが全部粉々になるんだよ」

無言の五人の間を流れる風が、粉末となったサイコロを運んでいく。

そして、その沈黙を破ったのは

「マスター、サイコロには特別な細工及び劣化や損傷は見られませんでした。」

「冷静に分析なくてイイツ!!」

ゴンと、先ほどの魔法書で茶々丸にツッコむエヴァ

「まあそういつてやるなよ？機械の利点は冷静な分析だろ？」

「そうですマスター、ついでに言えばサイコロの先ほど速度はいたって普通でした。」

サイコロが表した数字、 1・1・3・4・6・5 いたって普通。

「まーまー気にすんな、こんな平凡な数字でも五百回繰り返されれば、十分異常さ。」

「は、はい!!」

再びネギはサイコロを転がし始める。

「茶々丸ちゃん、ネギセンスの結果、しっかり記録頼むよ。」

「了解しました。」

せつせとサイコロを転がすネギを一瞥したエヴァは、公夜に問いかける。

「貴様もその異常アフノーマルなのか？」

「もちろん、俺は歴史上で最高クラスの異常者だ。」

「ほう、貴様のどのような異常性なのだ？」

「さあてな、俺にもよくわかんねえや。」

「貴様、……………ふざけているのか」

エヴァの声が少し低くなるとともに、エヴァの周囲に微量の風が吹く。

封印をされていながら、残ったほんの少しの魔力がもれ始め、そ

れが風と気迫となってエヴァの周囲に満ちるが公夜はそのようなことは気にしない。

裏の六人（プラスシックス）とも相対できる精神力をもつ公夜にとつては、そのような気迫など全く通用しない。

「これは俺がわかつている限りだが、俺の持つ異常な駆動、魔力量、学習能力、全てが俺自身の異常性だということだ。」

「ふん、まるで才能の塊だな、何でも持っているとは。」

「まあな、・・・・・・・・・・・・・・・・俺は全部持つてただけだ。」

「・・・・・・・・」

「うわーん!!」

公夜の発言に沈黙、そして思考に入ったエヴァを現実に戻したのはネギの鳴き声だった。

「二百回の実験の結果、規則性は見られません。」

「んーマジか・・・・・・・・エヴァ、こいつの魔力量は異常なんだろう？」

「フン!! そうだ、全く使いこなせていないがな!!」

大きくそっぽを向いたエヴァの発言をふまえて、公夜が考え、言った。

「魔法関係の異常では、サイコロ実験は通用しないかも知れないな、おい、あの学園長の孫はどうなんだよ？」

「こ、木乃香のこと？」

「そうそう、近衛木乃香、長い付き合いなんだろう？双六とかしたことないのか？」

「うーん、アンタみたいなことはなかったと思うけど・・・って、何で木乃香が出てくるのよ！？」

「は？あーそうか、知らないのか。あの木乃香って奴、その先生よりも潜在魔力量あるんだろ？。」

事前に箱庭学園から送られた情報と、後の計画のために掻き集められた超鈴音の情報、そして本人の頭脳によって判断した事実だ。

「学園長の孫は伊達じゃねえんだ。」

「どうしてそんなこ「おっと、失礼、ここでお話はおしまいだ。はあ？」」

公夜は急に跳びあがり、元々いた椅子が見えない刃物のようなものでバラバラにされた。

「な、何よ！？」

「ネギ君！！明日菜君！！無事か！？」

「た、高畑先生！！」「タカミチ！！」

高畑を含めた数人の魔法先生達が公夜を囲い込み、各々杖や刀を構え臨戦態勢をとる。

一見絶体絶命と見える状況でも、公夜は笑い、笑う。

「あーあー、折角のおしゃべりを邪魔されちまったなー、いいのかよ？こんな朝っぱらから魔法使ってさ？そのヒゲダンディーなおじ様？」

「…………すでに人払いもすんでいる、ここにいるのは魔法関係者だけだ。」

「嫌われちまったなー、俺も。」

まあいいやと口が動き。

「相手してやるよ。」

ゆっくり腕が上がり、構えを取る。

「今日の俺は、ちょっと目の色が違うんだ。」

実験、否、実戦開始。

第十話 サイコロ実験、実戦開始（後書き）

すごく、お待たせしました。

いつまでも待っていて下さった方、誠にありがとうございます。

魔法関係の異常者はサイコロが通用しないということにしました。
何とか、次の話も早く投稿したいと思います。

そこで、今だ未定のヒロインですが、一人は決まっていますが、もう一人ネギまキャラで募集したいと思います。

めだかキャラはフラスコ計画頑張っているので……
よろしく願います。

第十一話 実戦終了

side out

現在、不知火公夜の視界は実に奇妙な状態である。

まず視界内に自分自身がある、さらにその視界が転々と変わる。視界が変わるとは意味がわからないだろう。だが今まで自分自身の前面が見えていたのに、急に視界には自分の側面が見えるようになる。

この状況を作り出しているのが彼のスキル。
パラサイトシーイング
欲視力だった。

「おいおい！背後からの奇襲はもつと上手くやろうぜ」

「高畑先生！どうするんですか！？攻撃が全て読まれてますよ
！！」

魔法先生の中でも比較的若い瀬流彦が学園でも最強クラスの高畑に叫ぶ。

その間も高畑は居合い拳瀬流彦は専門の補助魔法でたった一人の部外者に応戦する。

（魔法先生方！！狙撃手配備完了です。）

そこに念話による連絡が入る。

麻帆良学園に雇われた狙撃手、龍宮真名が配置についたという連絡だ。

「狙撃手か・・・まあ悪くないな、殺気が届かないほどの長距

離狙撃とはな」

「……………何の事かな？部外者である君一人に狙撃手なんて物騒なものを。」

「うんうん、それで正解だ、ここで「なんでわかった!？」なんて言うほど馬鹿じゃないよな。」

と、言いながらも公夜は加多羅木が放った風魔法を剣筋をずらした葛葉刀子の刀で防ぐ。

「だが、狙撃手の方を向くのは止めたほうがいいぜ」

公夜は、魔法先生の一人が念話を聞いた瞬間、真名がいるであろう時計塔を見た視界を、視て、指差した。

(((逆だ!!)))

真名の配置を念話で知った魔法先生全員は呆気に採られるが、その中の数人はこれも公夜の策略の一つと警戒する。

「さあ、撃つてこいよ、何が飛んでくるんだ？ライフル弾？ミサイル？全部交わしてやるぜ？」

そのような心情も、行橋の異常を使っていない公夜は気付けず、余裕の笑みを絶やさない。

そして、警戒している人物の一人である真名はその余裕の真偽を判断するため、ライフルの引き金を引いた。

その一発の弾丸は容易く公夜に届いた。

「なん・・・・・・・・だど？」

腹部を打ち抜かれた公夜はその場に倒れた。

魔法使いたちは動きを止め、安全確認のためにまず高畑が公夜に近づく。

「大丈夫だ、一応麻酔弾を使っているからね、といってもそう簡単に目は覚めないだろう。」

倒れた公夜の背を揺すり、完全に気絶を確認した高畑は拘束魔法に長けた魔法使いたちに目で公夜の拘束を指示し、それに従った魔法使いが公夜に近づく

『魔法使い共を拘束しろ』

気付いた時にはもう遅い。

拘束対象を異常者から魔法使いに変えた炎、水、土、風、光、影がネギや明日菜、拘束魔法を放った魔法使い達を含めたその場の全員を拘束する。

そして、唯一拘束を逃れた男は気だるそうに立ち上がった。

「なーんてな、ケツ、全くたまったもんじゃねえぜ、揃いもそろって甘々、拘束好きの変態ヤロー共がよ」

また奴の雰囲気が変わった・・・・・・・・・・と高畑は考える。

何度も公夜と対面するたびに見る公夜の転々と千変万化する雰囲気、人格、動き。

「この麻酔弾・・・・・・・・塩酸チレタミンと塩酸ゾラゼパムの混合薬

か？結構メジャーな薬品だな、こんなのとつくの昔に対策してるっ
つーの」

「対策？特効薬のようなものを事前に服用していたのか？」

詠唱ができない高畑は、他の魔法使いたちがこの拘束を解除するための時間を稼ぐために話を続ける。

「ハ、そんなわけねーよ、てめーらの脳みそじゃそんなのが限界
なんだろうが、オレは違うんだよ。」

公夜は自分の頭を指差し怒鳴った。

「自分の体を改造したに決まってんだろっが、簡単だろ？」

「そ、そんなことを……………」

「だーかーらー、そりゃ他人の体を勝手に改造したんなら流石に
アレだけだよ？自分で自分を改造したんだぜ？完全に自己責任だろ
？無免許でも私有地でならトラクターとか乗り回してもいいのと一
緒だろ？しっかしつまんねーな、ホントはもっとファンタジーなア
イテムを期待したんだがな。」

「期待？」

「そーだよ、もしも未知の魔法の薬とかだったらいいサンプルが
手に入ったのによ。」

「そ、それで君が手におえない、僕たちに捕まるとは思っていな
かったのかい？」

「そんなときや、そんな時さ」

「・・・・・・・・・・」

質問した高畑をはじめ、ほぼ全員が驚愕に声を出せない。

「それじゃ、俺は帰ろっかなー、ありがとなーエヴァちゃん手出さなくて。」

公夜は現在も光の拘束魔法で縛られたエヴァに言う。

「フン、次はお前の血、吸い尽くしてやる。」

「おー楽しみに待ってるぜ、その時にはヤクルトも忘れずにな。」

そう言って、公夜は再び真帆良学園の魔法先生から逃げおおせた。

第十一話 実戦終了（後書き）

どうも、お久しぶりです。

十一話はとても久しぶりに書いたので、さらに雑になっていると思います

本格的に受験に力を入れないといけなくなったので、次の更新もまた遅くなると思います。

最低勇者様、何度も感想を書いていただき申し訳ありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5514m/>

ネギまボックス

2011年10月11日15時08分発行